

第86回日本皮膚科学会東京支部 学術大会を開催して

(2022年11月19・20日)

※京王プラザホテルとWeb配信のハイブリッド開催

田中 勝

東京女子医科大学附属足立医療センター皮膚科教授

はじめに

第86回日本皮膚科学会東京支部学術大会を、2022年11月19・20日に京王プラザホテル(ハイブリッド形式)にて開催しました。大学分院として初めて本学術大会を開催させていただくことはたいへん光栄なことでした。COVID-19の感染状況は第8波の始まりの時期でしたが、幸い生活制限も緩和されており、学会登録者数2,501名のうち1,343名の方が現地で参加してくださいました。

テーマ

皮膚科が扱う疾患は多岐に渡り、極めてまれな疾患も含まれることから、しばしば診断が困難です。1

人が学べる知識には限りがあり、どんなに長く経験を積んでも未知の疾患が数多くあるため“すべての皮膚科医が各々の得意分野のエキスパートとなり、お互いに新しい知識を学会やWeb上で教え合いながら診断力を高めていくことが必要である”という願いを込め、本学術大会のテーマを「皮膚科診断力を磨く」といたしました(図1)。

プログラム

本学会の最大の特徴として、1日目に、H. Peter Soyer先生(The University of Queensland)をはじめとする海外のエキスパート18名による“ダーモスコピー国際シンポジウム”，2日間に分けて韓国，タイ，香港，台湾の先生方6名による“Asian Dermatology”，2日目にLorenzo Cerroni先生(Medical University of Graz)と安齋眞一先生(PCL Japan)，後藤啓介先生(都立駒込病院病理科)，福本隆也先生(福本皮膚病病理診断科)による“皮膚病理シンポジウム(日常診療に役立つ皮膚病理診断)”を企画しました。特別講演1では天谷雅行先生(慶應義塾大学)と山上淳先生(東京女子医科大学)に天疱瘡について，特別講演2ではAndrew Y Finlay先生(Cardiff University)に皮膚疾患が家族のQOLに与える大きなインパクトを示す指標となるfamily dermatology life quality index(FDLQI)について，また福原俊一先生(京都大学)に疾患共通の新しい指標となるquality of life disease impact scale(QDIS)について，特別講演3ではJohn A. McGrath先生(King's College London)と玉井克人先生(大阪大学再生誘導医学)，乃村俊史先生(筑波大学)，久保亮治先生(神戸大学)に遺伝性皮膚疾患



図1 大会ポスター



図2 参加記念品のマスクとコングレスバッグ

についてご講演いただきました。また、会長企画教育講演として、原田晋先生(はらだ皮膚科クリニック)に蕁麻疹の原因、岡本祐之先生(関西医科大学名誉教授)にサルコイドーシスの皮膚病変、渡辺晋一先生(帝京大学名誉教授)に世界標準と異なる日本のアトピー性皮膚炎治療についてご講演をいただき、大反響をいただきました。ほかにも、多数の教育講演やハンズオンセミナーを企画し、テーマの通り「皮膚科診断力を磨く」ための盛りだくさんのプログラムとなりました。

懇親会については通常の形では行えませんでした。1日目の終わりに夕方から20時までカクテルサービスを行い、ささやかながら歓談の場を設けました。美味しいワインとチーズ、各種IPAとI.W.ハーパーやラフロイグ、ボウモア(会長が厳選!), そのほかの軽食を味わいながら、久しぶりの再会を喜び、会話を楽しんでいただきたいの願いを込め、終了した会場を広く開放し密にならないよう配慮しました。参加者の先生方にはたいへん好評で、初の試みながらよい企画となりました。

記念品はマスクにしました。コロナ禍の生活はまだ続きそうですが、通勤や休日に彩りを添えていただけたらと、カラフルなマスクのセットをバッグに入れてお持ち帰りいただきました(図2)。

おわりに

準備の段階では不安もありましたが、日本皮膚科学会事務局の皆様、とくに山田紀子様、山本亜紀子様の多大なるご尽力と、多くの方々からのご支援により予想以上の盛会となり安堵しております(図3)。この場をお借りして心から感謝申し上げます。



図3 大会登壇者とともに